

# 大井遺跡

—大井遺跡群第1次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第599集

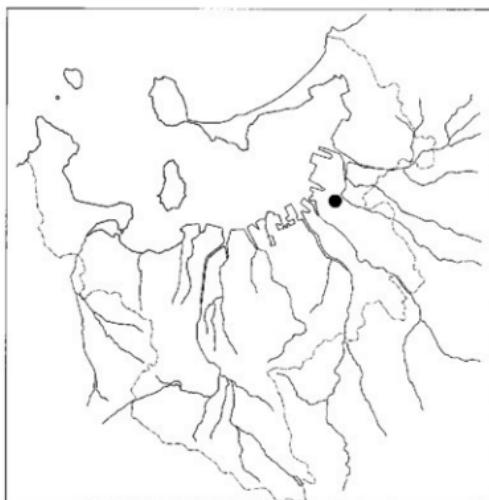
1999

福岡市教育委員会

# 大井遺跡

—大井遺跡群第1次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第599集



遺跡略号 001-1  
遺跡調査番号 9731

1999

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古来アジア大陸との交流を通じて国際都市として発展してきました。現在、国際化の流れの中で、アジアにより一層開かれた国際都市福岡を目指し、文化、交通、経済の情報発信地としての機能をさらに充実させようとしています。それに伴い、福岡空港も国際空港としての性格を強め乗降客数、物流の急激な増加に対応すべく、周辺地区が整備されつつあります。

本書は、空港北側地区の再開発事業に伴う埋蔵文化財調査を報告するものです。調査の結果、中世の水田造構が検出され、当時の生業を知る上で重要な知見を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで空港周辺整備機構の関係者及び地元の方々には多大なご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表すると共に、本書が文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

## 例　　言

1. 本書は福岡市博多区大井2丁目4における騒音遮蔽施設建設のための再開発事業に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成9(1997)年7月24日から10月31日にかけて発掘調査を実施した大井遺跡第1次調査の報告である。
2. 本書で使用した遺構・遺物の実測、写真撮影、製図は福岡市教育委員会埋蔵文化財課の井上歎子が行った。
3. 本書の執筆・編集は井上が行った。
4. 本報告の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡調査番号	9731		遺跡略号	OOI-1	
調査地地番	福岡市博多区大井2丁目4				
開発面積	5,300m <sup>2</sup>	対象面積	5,300m <sup>2</sup>	調査面積	1,773.4m <sup>2</sup>
調査期間	1997年7月24日～10月31日			分布地図番号	21-2631

## 本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 遺構と遺物	7
(1)調査区土層	7
(2)水田遺構	7
(3)出土遺物	8
(4)小結	10

## 挿図目次

第1図 大井遺跡群と周辺の遺跡(1/25,000)	3
第2図 大井遺跡群と第1次調査地点の位置図(1/4,000)	4
第3図 調査区位置図(1/750)	6
第4図 水田面断面図(1/150)	8
第5図 調査区水田遺構平面図(1/300)	折り込み
第6図 調査区壁面土層断面図(1/80)	折り込み
第7図 出土遺物実測図(1/3)	9

## 表 目 次

表1 水田面積・周囲長	8
-------------	---

## 図版目次

### 図版1

1. 調査区北東側全景(南西から)
2. 調査区南西側全景(北東から)

### 図版2

1. 調査区北東側全景(南から)
2. 調査区北東側南西半分(南東から)
3. 調査区北東側全景(北東から)
4. 調査地点全景(南西から)

### 図版3

1. 調査区南西側全景(南東から)
2. 調査区南西側全景(東から)
3. 水田⑤畦畔水口(北西から)
4. 調査区南西側畦畔(北東から)

### 図版4

1. 調査区北東側北東壁(A A')土層
2. 調査区北東側南西壁(B B')上層
3. 調査区南西側南西壁(C C')土層

### 図版5

1. 調査地点上空より北西方面を望む
2. 調査地点上空より南東方面を望む
3. 調査地点上空より大井中央公園及び南西方面を望む
4. 作業風景

### 図版6

出土遺物

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過

1992年11月11日に、空港周辺整備機構より、騒音遮合施設建設のための再開発事業に先立って博多区大井地区における埋蔵文化財の有無について事前審査依頼が提出された。申請地は大井遺跡地内に所在し、申請面積も広大であるため、埋蔵文化財課では1992年12月15日～17日、1993年1月22日の2回に分けて試掘調査を行った。その結果、申請地のうち大井2丁目4番地内において、地表面下120～130cmで人や牛の足跡、畦畔が残った青灰色粘質土層が検出され、土師器、青白磁が出土したことから中世の水田址と判断された。この成果をもとに協議を行い、この地区内において発掘調査を行い、記録保存を図ることになった。空港周辺整備機構の事業計画が定まった後、福岡市教育委員会埋蔵文化財課との間に発掘調査及び資料整理に関する受託契約を締結した。調査は1997年7月24日に着手し、10月31日に終了した。

## 2. 調査体制

調査委託 空港周辺整備機構

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査統括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝(前) 柳田純孝(現)

第2係長 山口謙治(現) 調査第2係長

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 小森彰(前) 文化財整備課 谷口真由美(現)

調査担当 試掘調査 井澤洋一 吉武学

発掘調査 長家伸(7月24日～8月1日) 井上嶺子(8月4日～10月31日)

調査作業 秋山温 伊藤美伸 奥田弘子 兼田ミヤ子 高瀬一夫 桑原美津子 後藤タミ子

志堂寺堂 柴田博 高手與志子 砥板春美 野口リュウ子 林厚子 吹春恵治 藤原直子

前山政義 松浦滋子 森本良樹 萬スミヨ

整理作業 大賀順子 坂井かおり 佐々木涼子 藤信子

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について空港周辺整備機構をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

## II. 遺跡の立地と環境

福岡市の大半を占める福岡平野は、東から南にかけて背振、三部山塊に囲まれ、北は博多湾に面し、南北に伸びる丘陵と沖積平野を交互に連ねて形成される。その沖積平野を西から、室見川、樋井川、那珂川、御笠川、宇美川が貫流し、それぞれの河川により開拓された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。地理的に詳しく述べると、「福岡平野は海岸付近の砂丘および浜堤、それに続く低地、各河川に沿った沖積段丘を含む河成平野、沖積地背後の平坦面を形成する洪積段丘とに区分できる。」<sup>13)</sup> このうち、沖積地は臨海平野と河成平野に分けられ、各々博多湾岸を中心とする部分と河川に沿った氾濫原を中心とする部分がある。

狭義の福岡平野とは、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一帯、那珂郡、御笠郡に当たる部分で、この福岡平野を中心として周辺に重要な遺跡群が点在する。福岡平野から見てみると、博多遺跡、比恵遺跡、那珂遺跡、板付遺跡、諸岡遺跡等、御笠川から宇美川にかけての博多湾東岸に形成された南北に長い砂丘上には、箱崎遺跡、吉塚本町遺跡、堅粕遺跡、吉塚遺跡、豊遺跡等が分布する。また、福岡平野の東を画す月隈丘陵一帯には下臼井遺跡、上臼井遺跡、中山遺跡、摩田青木遺跡、下月隈遺跡等が広かり、御笠川の東岸、諸岡丘陵と月隈丘陵に挟まれた沖積地には宿居遺跡が位置する。

大井遺跡は、福岡空港の北側、宇美川が北から西へ流路を変える地点の西岸に立地する。標高約4mの沖積地上で、地理的に見ると、宇美川のつくった氾濫原にあたり、上述の地形のうち河成平野に含まれる。現状では更地である宅地跡であるが、昭和5年の地形図には水田と記載されている。

大井遺跡は今回が初めての調査であり、遺跡の性格を知る上でまず周辺の遺跡を概観してみる。

### 箱崎遺跡

御笠川と宇美川に挟まれた南北に伸びる砂丘上に立地する。現在までに16次の調査が行われている。遺跡群の中には、921(延喜21)年大宰府觀世音寺の巫女橋滋子に八幡大菩薩の託宣があり、923(延長3)年に、穂波郡の大分宮を遷座、創建した菖崎宮が位置する。創建時に近い遺構は10世紀後半代の溝のみで少ない。その他古墳時代初頭から近世まで変動はあるものの生活痕跡が認められる。

### 吉塚本町遺跡

JR吉塚駅周辺で箱崎遺跡と同じ砂丘上に位置する。現在までに4次の調査が行われている。弥生時代後期から古代にかけての集落跡や近現代の旧国鉄操車場の基礎等が検出されている。特に古代には土鍤、製塙上器等の漁労具、硯、瓦等を持つ集落が検出され、漁労、製塙等の生業を行いつつ公的な関係を持っていた集落と推定される。

### 堅粕遺跡

JR鹿児島本線を挟んで千代1丁目、吉塚1丁目、堅粕1・3丁目にまたがる。上記と同じ砂丘上に位置する。現在までに9次の調査が行われている。奈良時代～平安時代の集落を中心として、古墳時代前期の方形周溝墓、後期の土壙などが検出されている。特に越州窯系青磁、縁軸陶器、瓦、墨書き土器、馬具などが出土しており、律令期の公的施設の存在が考えられている。

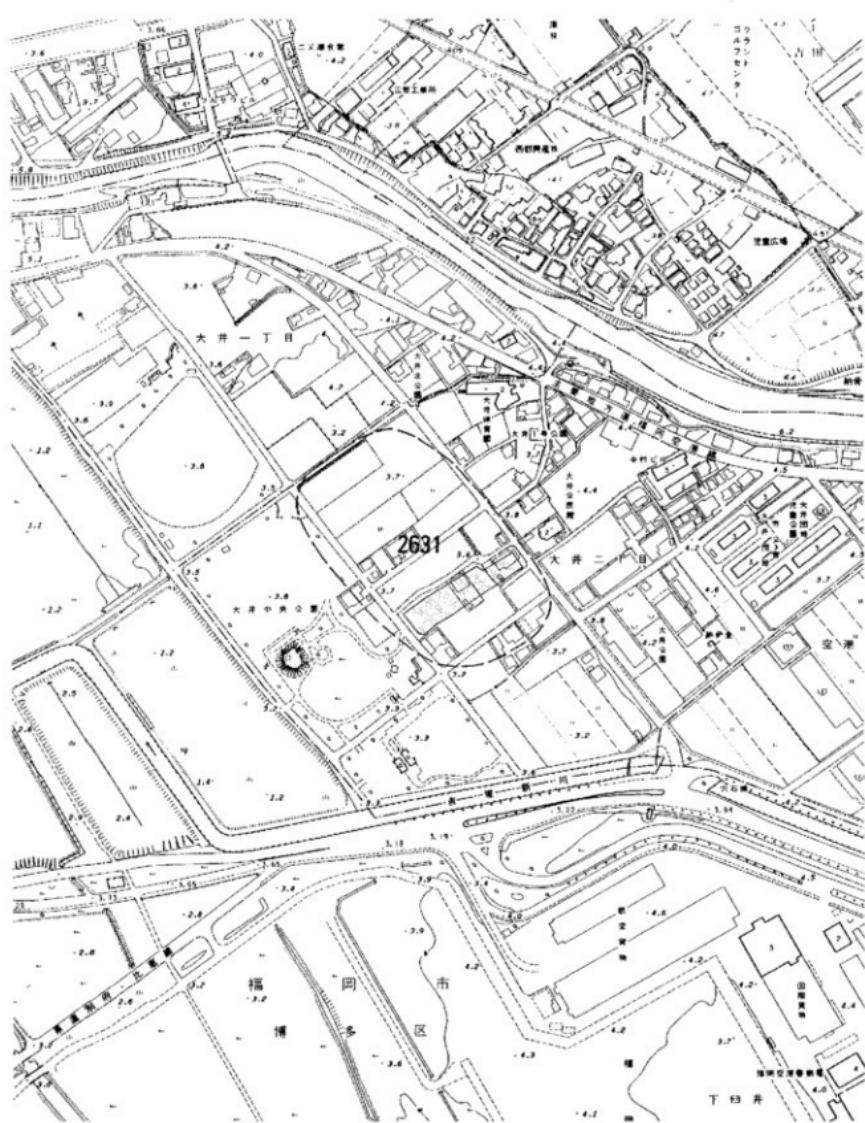
### 吉塚遺跡

堅粕4丁目、吉塚3丁目にまたがる。上記と同じ砂丘に位置する。現在までに6次の調査が行われている。弥生時代中期から中世にまたがる生活痕跡が検出されている。これまでに貨泉、銅鏡、山陰系瓶形土器、滑石製壺、白磁黒花等特色ある遺物が出土しており、堅粕遺跡や吉塚本町遺跡と同様に中世における博多や箱崎との関連が伺える。



第1図 大井遺跡群と周辺の遺跡 (1/25,000)

- |          |        |         |           |         |
|----------|--------|---------|-----------|---------|
| 1.箱崎遺跡   | 4.吉塚遺跡 | 7.大井遺跡  | 10.上白井遺跡  | 13.比恵遺跡 |
| 2.吉塚本町遺跡 | 5.豊遺跡  | 8.下白井遺跡 | 11.席田青木遺跡 |         |
| 3.堅粕遺跡   | 6.博多遺跡 | 9.中山遺跡  | 12.雀居遺跡   |         |



第2図 大井遺跡群と第1次調査地点の位置図 (1/4,000)

### **博多遺跡**

御笠川と那珂川に挟まれ、博多湾岸に形成された砂丘上に位置する。現在までに113次の調査が行われている。中世都市「博多」を中心として弥生時代から近世、現代にまで続く複合遺跡である。特に中世における博多港、息浜における都市の展開、太閤町割以前の町割りの復元、対外貿易の拠点都市を示す膨大な輸入陶磁器の出土など当時の「博多」を知る上で重要な資料を得ている。

### **比恵遺跡**

博多遺跡と同じく御笠川と那珂川に挟まれた洪積丘陵の北端部分に立地する。現在までに66次の調査が行われ、弥生時代から古墳時代を中心とした集落・墓地等が検出されている。特に前期では墳丘墓の可能性が指摘される甕棺墓群、中期～後期にかけては集落のほかに生産活動を伺わせる青銅鋳型と取瓶の出土、古墳時代前期の方形周溝墓、「那津官家」の可能性が指摘された後期の大型建物群・構の検出等奴田の拠点とされる遺跡群の性格を示している。

### **席田青木遺跡**

福岡平野の東を画する月隈丘陵の北端近くに位置する。現在までに3次の調査が行われている。弥生時代中期の甕棺墓群、弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期の集落、7世紀中葉の古墳、中世の集落・墓地・城、近世墓地等が検出されている。この遺跡の周辺、月隈丘陵上には大谷遺跡、久保岡遺跡、赤穂之浦遺跡、宝満尾遺跡、下月隈天神森遺跡等弥生時代の中心的な遺跡群が分布する。

### **雀居遺跡**

御笠川の東岸、標高約5mの沖積地に位置する。現在までに13次の調査が行われている。縄文時代晩期末～古墳時代前半に至る集落跡、古代後期～末にかけての集落、水田址、弥生時代前期～中期にかけての土塙墓、甕棺墓、中世の水田址等、出土遺物、遺構は質・量ともに優れ、該期における拠点的な集落が営まれていたと考えられる。

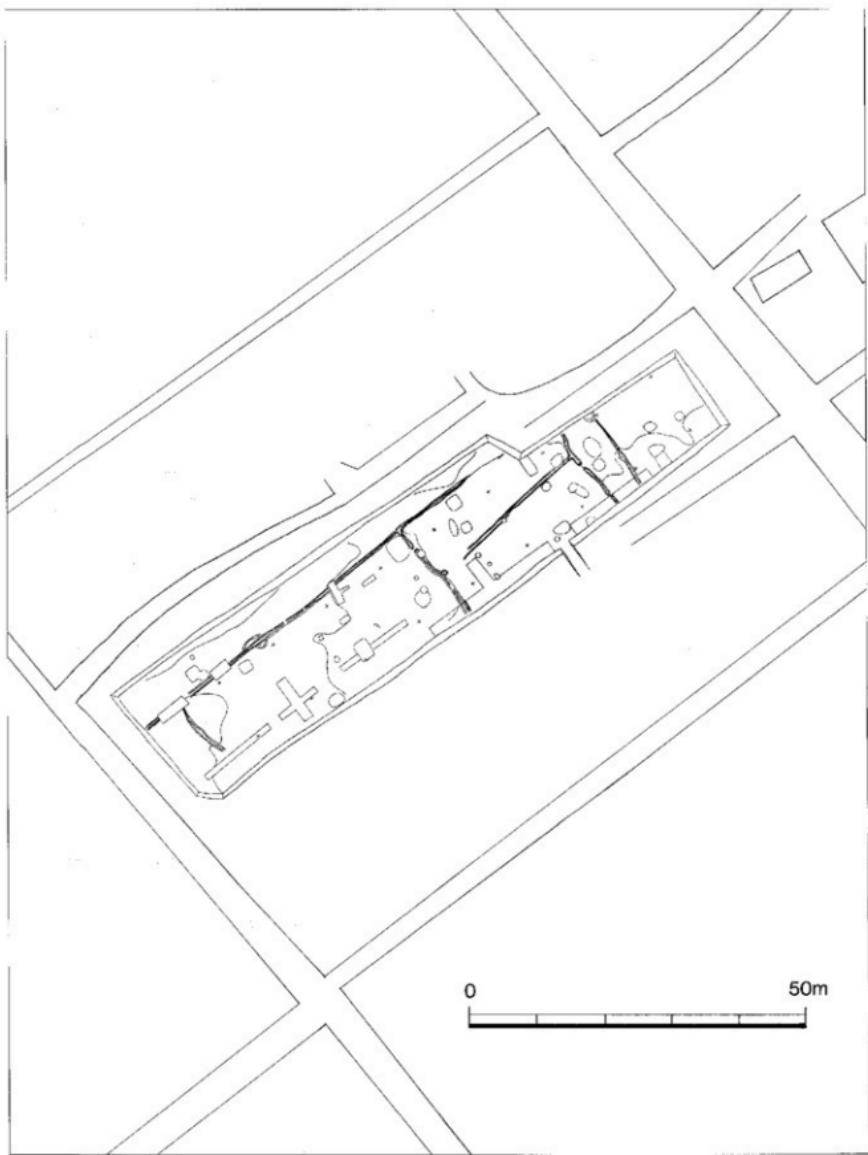
以上のように、大井遺跡の周辺には弥生時代から中世を中心として各所に拠点的な集落が営まれていたと推定される遺跡が分布している。大井遺跡がこの遺跡群の中でどのような位置づけをなすのか、今後の調査も含めて検討していく必要があろう。

註

ト山正一「第2章 福岡平野の縄文海進と第四紀層」「福岡平野の古環境と道路立地－環境としての遺跡との共存のために」1998 九州大学出版会

その他福岡平野の地形全般について次の書を参考にさせていただいた。

小林茂・義望・佐伯弘次・高倉洋彰 横『福岡平野の古環境と道路立地－環境としての遺跡との共存のために』1998 九州大学出版会



第3図 調査区位置図 (1/750)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

大井遺跡第1次調査は、遺跡の性格及び調査範囲を確定するためにまず、1997年7月24日調査区内に数本の試掘トレントをバックホーによって設定することから始めた。その結果、調査区内的北西側半分は現地表下約1mで水田面が検出され、これまでの試掘結果と照らし合わせて南東側半分も水田が続くことが予想されたが、プレハブ事務所の設置、重機の出入り口、廃土置場に当てるため、北西側半分を調査の対象とした。さらに十数りの関係上、この調査区を北東半分と南西半分の2回に分けて調査することにした。7月28日から北東半分の表土剥ぎをバックホーによって行った。水田面の上には10~30cmの粗砂が堆積しており、水田面直上の粗砂面まで剥ぎ取りを行った。その後、人力で粗砂の除去を行い、水田面及び畦畔を検出した。10月6日から反転して南西側半分の表土剥ぎを行った。同じく人力による粗砂の除去と水田面の検出を行い、遺構実測と写真撮影を行った後、10月27日に撤収、10月28日から31日にかけて埋め戻しとプレハブの撤去等を行い、調査を終了した。

#### 2. 遺構と遺物

##### (1)調査区土層(第6図、図版4)

調査区内の土層を、AA'、BB'、CC'のセクションで見てみると、今回調査した水田面上に旧耕作土が堆積しており、これが昭和初期の水田に相当すると思われる。その上面は擾乱が多い。調査した水田面は標高約2.5m~2.7mの青灰色粘質土層で、その上面に明黄褐色ないし黄白色の粗砂層が堆積する。青灰色粘質土層と粗砂層の間には部分的に灰褐色シルト層が堆積しており水田面との判別が困難な箇所もあったが、足跡と土質で判断した。この水田面である青灰色粘質土層は約20~50cmの厚さで堆積し、その下層は約50cmの暗青灰色粘質土層、さらに下層は河川の堆積と思われる灰色粗砂層となる。ローリングを受けた弥生土器片が出土しており、弥生時代の河川が流れていると考えられる。

##### (2)水田遺構(第5図、図版1~3)

青灰色粘質土層である水田面上には全面にわたって、10~30cmの厚さで粗砂層が堆積しており、畦畔等はかなり良好に残存していた。水田面と粗砂層の間には部分的に灰褐色シルト層が堆積しており、水田面検出時には判別が困難であった。水田面はおよそ東から西へ向かって低く傾斜しており、ほぼ北東~南西方向の畦畔が2本、北西~南東方向の畦畔が2本検出されている。これらの畦畔に囲まれて形成されている水田面はほぼ長方形をなし、調査区内で検出されている水田面から想定すると面積の広い水田面と狭い水田面とが混在している。水田面がかなり広いためか比高差は調査区の北東端と南西端約100mの間で10cm程度である。

畦畔は削り出しのしっかりした作りのもので、非常に残りがよく、削半されたり、つぶれたりしている痕跡はない。畦畔はところどころ途切れさせ水口を作り出している。また、明確な水口ではなくとも畦畔が部分的に低くなっている箇所があり、田越しで水が送られていたと思われる。畦畔に囲まれた各水田面がすべて明確に検出されているわけではないため断定はできないが、水の流れは水田①から水田②、水田③から水田②、④、⑤の方向が想定される。

水田面上には人や牛の足跡が無数に検出された。特に規則性は見られなかった。また、粗砂層より上の層から掘り込まれたと思われる近世~近代の井戸が2基、現代の井戸が1基検出されている。その他の、畦畔が所々断ち切られている箇所があった。当初、水口と推定していたが、鋭い断面であった



第4図 水田面断面図 (1/150)

ため、粗砂面、シルト面を観察した結果、これらの面から掘り込まれていると考えられる溝が数条検出された。この溝は北西—南東方向に10~20m間隔で平行して並んでいる。近世~現代の攪乱か。

表1 水田面積・周囲長

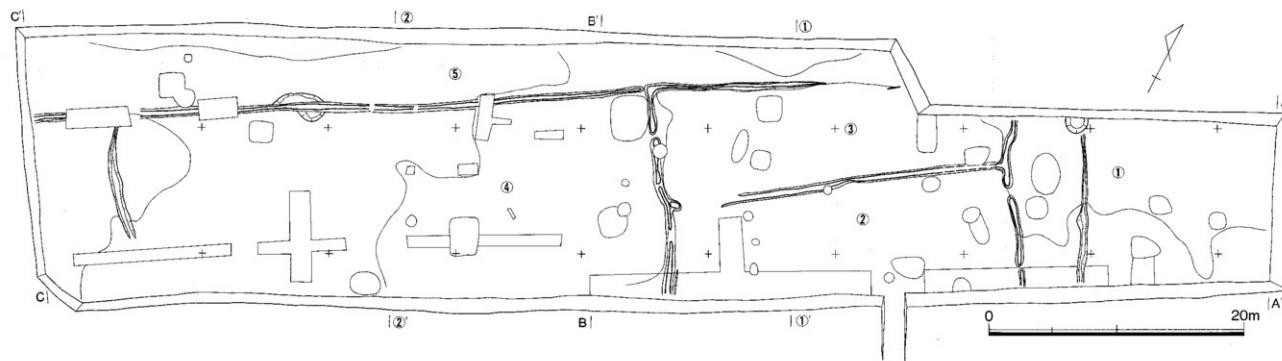
	水田面積	周囲長
水田①	262.3m以上	66.1m以上
水田②	225.7m以上	70.4m以上
水田③	186.9m	68.7m
水田④	723.1m以上	127.2m以上
水田⑤	300.4m以上	146.5m以上

### (3)出土遺物(第7図、図版6)

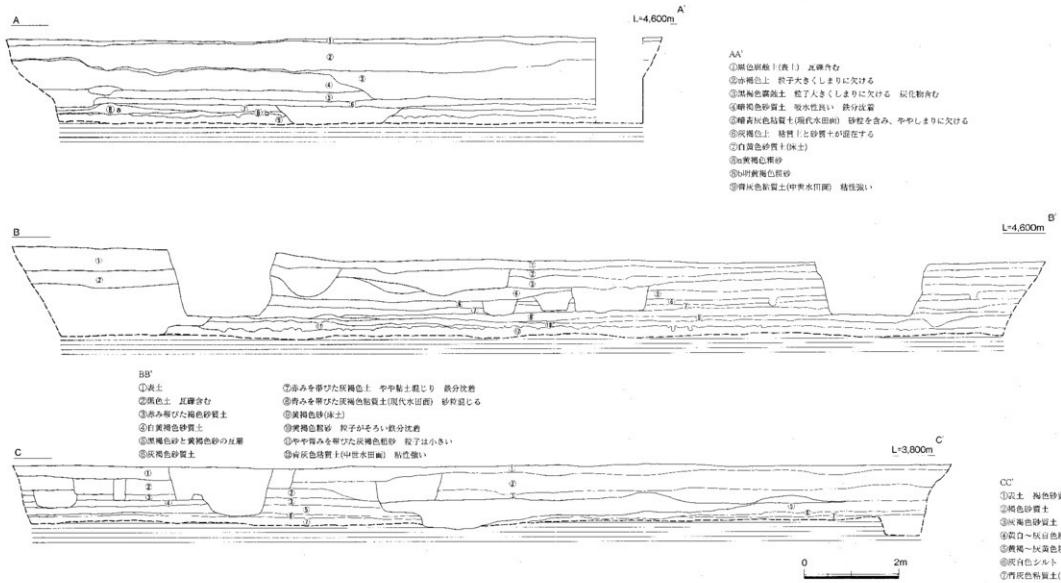
出土した土器はパンケースで1箱程度である。そのほとんどはローリングを受けており、土器の種類や部位すら明確にし得なかった。土師器や須恵器、弥生土器も混じっていたようであるが、断定できるものは少ない。わずかながら同定できたもの、さらに陶磁器類で判別し得たものを次に掲げる。水田面上の粗砂層から出土したもの、水田面上及び水田面である青灰色粘質土層から出土したものとに分ける。

1~6は水田面上の粗砂から検出されたものである。1は白磁の皿である。復元口径12cmである。釉薬の表面にはビンホールがある。灰褐色で、端反り形の口縁部の、釉を剥いた口禿を呈す。2は染付の皿である。復元口径10cmである。やや灰色を帯びた白色を呈す。端反り形の口縁部で内外面の口唇部直下に圓線を描く。3は染付の皿である。復元口径9cmを測る。口縁部は緩く内湾して立ち上がる。若干灰色を帯びた白色を呈し、内面に文様を描く。4は肥前系磁器碗である。復元口径8cmである。やや青みを帯びた釉薬を施し、外面に文様を、内面口縁部下に圓線を描く。5は須恵器の坏身である。灰褐色を呈し、胎土は精良である。6は上部器の口縁部である。砂粒、カクセン石を含み、白黄色を呈す。

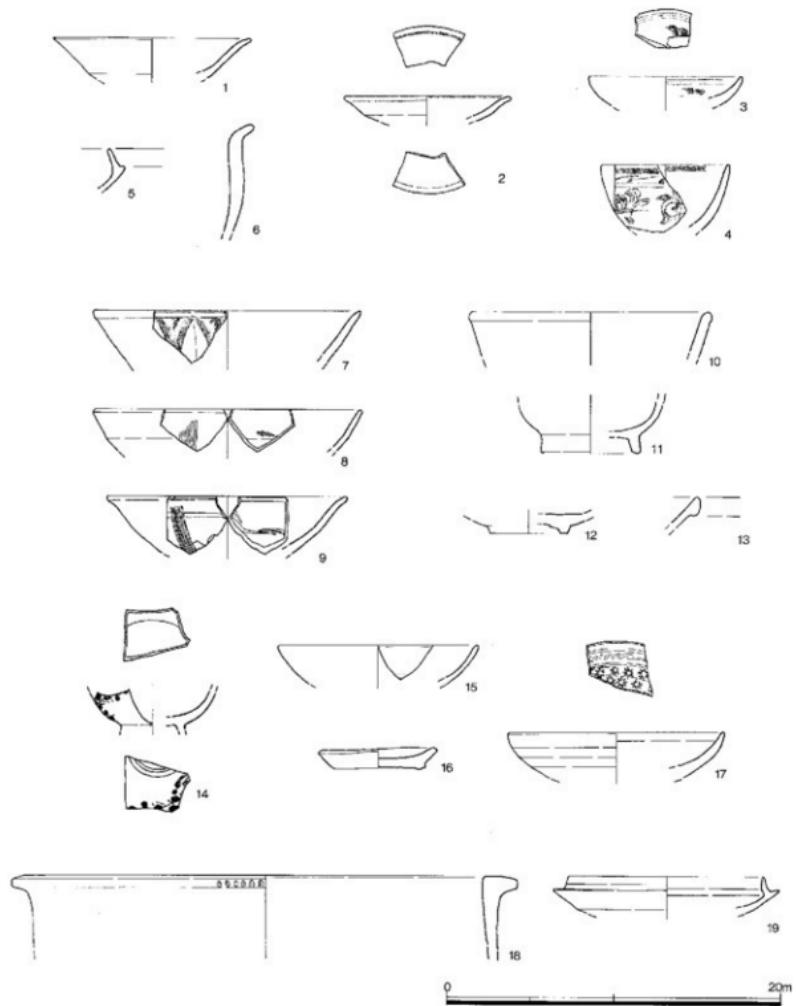
7~19は水田面上及び水田中より出土した。7は龍泉窯系の青磁碗である。蓮弁文を施す。復元口径16cmを測る。やや黄みを帯びた緑色の釉薬を施す。8、9は同安窯系の青磁碗である。8は復元口径16cm、9は14cmである。やや灰色を帯びた緑色を呈し、横描文が施される。9の口縁部端はやや反り、沈線が施される。10は青磁碗である。復元口径14.6cmを測る。オーブル色の釉薬がやや厚めに施されている。口縁部端はふくらませて仕上げる。11は白磁碗の底部である。復元底部径は6cmである。外面にはやや緑色を帯びた透明釉がかけられるが内面は露胎である。12は白磁碗もしくは皿の底盤である。復元底部径は4.7cmである。外面は露胎であるが、内面には部分的にやや緑色を帯びた釉がかけられる。13は白磁碗の口縁部である。口縁は玉縁につくり、透明釉がかけられる。



第5図 調査区水田遺構平面図 (1/300)



第6図 調査区堆面土層断面図 (1/80)



第7図 出土遺物実測図 (1/3)

14は染付碗の底部である。復元底部径は4cmである。やや青みを帯びた透明釉がかけられ外面に文様を描き内面に圍線を巡らす。15は染付の碗である。復元口径は12cmである。青みを帯びた透明釉がかけられる。16は土師器の皿である。口径7cmで、底部は糸切りである。17は李朝の粉青沙器の皿である。復元口径13cmである。内面に1条と2条の圍線を巡らし、間に菊花文を施す。18は弥生時代前期の甕の口縁部である。復元口径30cmである。口唇部に刻み目を施す。赤褐色を呈し、胎上には金雲母を含む。19は須恵器の坏身である。復元口径12cmで、青みを帯びた灰褐色を呈す。

#### (4)小結

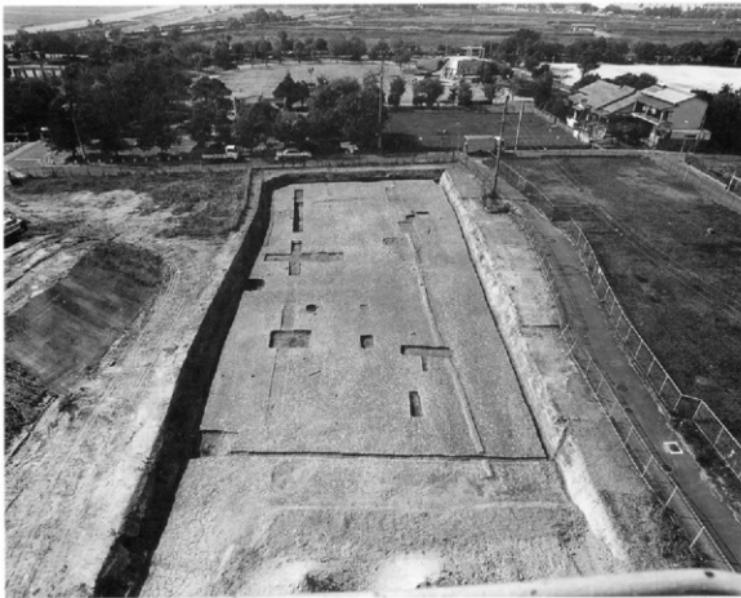
以上のように水田及び上層粗砂中より出土した遺物の時期の範囲は弥生時代から近世にまで及ぶ。弥生土器や須恵器はかなりローリングを受けているために混入と思われ、水田の時期に比定されるものではなかろう。

粗砂中から出土した染付は上限が17世紀頃で水田面が洪水により埋没した時期は17世紀まで下る可能性はある。一方水田上面ないし水田中より出土した陶磁器類を見ると、小片ながらも青磁・白磁が多く、図示したもの以外にも検出されている。青磁・白磁について見ると、12世紀～14世紀の範囲内におさまるが、李朝の粉青沙器が出土しており、これは15世紀～16世紀まで下るであろう。また、水田面と粗砂層との微妙な境目ではあるが染付も一部検出されており、15世紀～16世紀を水田の時期の下限と考える方がよいであろう。しかしながら一般的に水田からの出土遺物はごくわずかであり、本調査区もその例にもれず時期を決定するのはきわめて困難である。ゆえに本調査区の水田も中世の後半という大まかな時期範囲でくくっておく。ただ、水田面である青灰色粘質土層中より出土した青磁・白磁は12世紀～14世紀に比定されるものも多く、本調査地点及び周辺地域ではこの時期に生活が営まれていた可能性はある。

今回の調査ではごく一部ではあるが中世の水田を良好な状態で検出することができた。この水田に伴う集落がどこに存在するのか、周辺部の調査が少ないために現時点で決定することはできない。今後の調査成果に期待したい。



1. 調査区北東側全景(南西から)



2. 調査区南西側全景(北東から)

図版2



1. 調査区北東側全景(南から)



2. 調査区北東側南西半分(南東から)



3. 調査区北東側全景(北東から)



4. 調査地点全景  
(南西から)



1. 調査区南西側全景(南東から)



2. 調査区南西側全景(東から)



3. 水田⑤畔水口  
(北西から)



4. 調査区南西側  
畔  
(北東から)

図版4



1. 調査区北東側北東壁 (AA') 土層



2. 調査区北東側南西壁 (BB') 土層



3. 調査区南西側南西壁 (CC') 土層



1. 調査地点上空より北西方面を望む



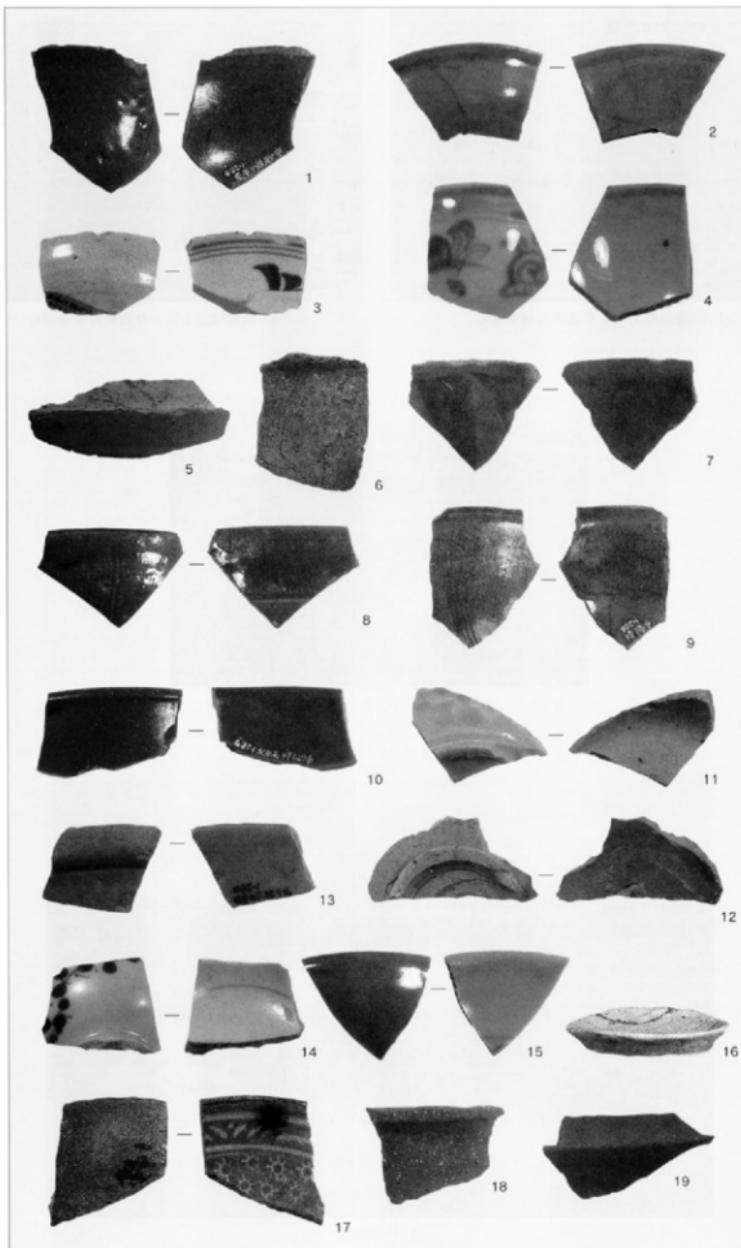
2. 調査地点上空より南東方面を望む



3. 調査地点上空より大井中央公園及び南西方面を望む



4. 作業風景



## 大井遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第599集

1999年(平成11年)3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1  
(092) 711-4667

印刷 川辺印刷有限会社  
福岡市南区高宮1丁目7-19  
(092) 521-4868

